

# 香取遺産

vol. 146

— 城山5号墳 —

## 「全身を表現した人物埴輪」



城山5号墳出土の人物埴輪

手前が人物埴輪出土状況

城山5号墳は、1号墳があった県立小見川高等学校から、谷を挟んだ北側の台地上にあります。昭和40年に立正大学の丸子亘助教授らによって発掘調査され、全長約51m・高さ約5mの前方後円墳で、古墳の上と中腹に円筒・人物・馬などの埴輪列が巡っていました。

埋葬施設は後円部中央にあり、穴を掘ってその中に木棺を埋置した木棺直葬ですが、内部の調査は実施されなかったため、副葬品などは不明です。また、墳丘の各所から、須恵器や土師器といった土器類、有孔円盤や勾玉などの滑石製模造品、銅釧(銅製の腕輪)なども出土しており、死者への祭祀に使われたものと考えられます。5号墳は、これらの出土遺物の特徴から、6世紀前半から中ごろに築造されたもので、1号墳(6世紀後半)に葬られた人物の前代の首長の墓と推定できます。

写真で紹介した2体の人物埴輪は、前方部の南西側中腹で発見されたものです。高さは右が113cm、左が120cmで、髪・腕・足の一部分が欠損していますが、ほぼ全身が残っています。頭には三角形の冠帽を被り、顔の両脇には美豆良と思われる髪が肩まで伸び、首には丸い粘土玉を連続して貼り付けた首飾りがあります。腕は棒状で手を腰にあて、上衣の裾は大き

く広がっています。上衣の右胸から左腰にかけて2本の線がありますが、刀剣もしくは衣の合わせ目を表しているのでしょうか。両足は円筒形で、足先には靴を履いたような表現がみられ、高さ30cmほどの器台に乗っています。2体とも全体の形や細部の表現が似ているため、同じ工人が作ったものと考えられます。このように、比較的忠実に全身を表現した人物埴輪のうち、全体が残っているのは市内では唯一です。

6世紀後半になると、城山1号墳など市内の人物埴輪の多くは、両腕が簡略化され、両足も省略されるようになります。使う粘土や焼成後の色調も5号墳の埴輪とは異なり、下総型人物埴輪と呼ばれています。

写真右の人物埴輪は、現在、県立中央博物館大利根分館で展示されています。左の人物埴輪は東日本大震災で破損したため、修復後、市文化財保存館(いぶき館)で展示する予定です。

生涯学習課

☎11224

